會報

昭和七年三月　13　日本山岳會

岩登りの思ひ出

武田久吉

昔話をする程に年を取らない心算で居る内に、老らくは何時しか押し寄せて、知らぬ間にはや定命に達して見れば、今は昔の思ひ出咄の一つ二つはする資格の備はつたやうに思はれる。一九一〇年といへば、年若い會員は未だ小學校へもどうかと思はれる頃の事、七月には蘇國のハイランドに遊んで、色々の高山植物に目を樂しませた私は、八月早々北ウエイルスの山登りに誘はれた。日本の高山を少しは歩いた經驗から推して英國の山等は、物の數とも思へないと、鼻の先であしらつて居た私も、同行の人々の話を綜合すると、雪や氷でこそアルプスに一籌を輸するも岩登りの道場としては押しも押されもせぬ處があるとのことに、早速ダウキー・エンド・マーシャルに出かけ三磅許りを奮發して一足の登山靴を仕入れた。序に幾本かのホブ・ネイルズのスペアーをも用意し、その頃の私に附きものゝ採集胴卵と壓搾用紙等は勿論缺かさなかつた。同行の人々は、アルパイン・クラブの如きは何のそのといふ、鼻息の荒いクライマース・クラブにも、其人ありと知られたジョーン・フアーマー教授（ロンドン理工科大學植物學主任教授）と現キユウ植物園長アーサー・ヒル氏、それに歐洲大戰當時はセンサーをやつて居たランキン大佐、その文字通りの驥尾に從ふのが東洋の端からポツと出の小生。

處で出發に先立つて、登山家で賑ふ Pen-y-Pass Hotel に往復葉書を飛ばせ、客室の豫約をした方が安全と聞いたまゝを實行はしたものゝ、返事は全く名の違つた Gorphwysfa といふのから屆いて、申込通り正にリザーヴ致し候とあつたので少なからず喫驚し、これを一行の先達に尋ねて、異名同物と判明して、安心の胸を撫で下したが、ゴルフイスフアとはウエイルス語でホテルの事とは更に驚かざるを得ない。一行四名は汽車の一室を買切りでラグビーやクルーウを過ぎ、ランディドウノ・ジャンクションで車を換へてから、終にベトウス・イ・コエト驛で下車し、自動車の盛でない時代の事とて、馬車を傭つてベニバス・ホテルに安着した。

こゝは北ウエイルスで最高のスノウドン山彙の蟠る所、その中心を過つてランベリスからベトウス・イ・コエト又はカベル・クーリッグに通ずる道路中の最高點なるランベリス峠（一一六九呎）の頂上から數十歩北に下つた山中の一軒屋、白亞塗二階建のさゝやかなホテルである。

海拔僅に四〇〇米にも足りない高距とはいへ、北緯五三度を何分か北に去つた土地丈けに、夏でも中々の涼しさである。

翌日から一行はサンドウキッチを衣嚢に、リーダーはロウプを肩に、私は採集胴卵を忘れずに、右を見ても左を見ても岩許りの山を上りつ下りつ、或はトリヴン、又はリユウエス、又はスノウドンへ、普通の登路を經ることは稀で、概ねチムネーだの、垂直に近い絶壁を、距離こそ短いが生命を一本の綱に托し、時にはバック・エンド・ニー・ツークや、時には一株のヘザーを渾身の力をこめて握りしめ、又ある時はリーダーの引く綱に釣り上げられて、手も足も宙に浮かして、山の巔に達したことも一再ではなかつた。

難場に掛つて最も邪魔なのは彼の胴卵で、その度毎に肩から外して、綱に結んで引き上げて貰ふより仕方がなかつた。それでも、その中には紫の Saxifraga oppositifolia だとか淡黄色の Dryas octopetala を初め、數々の高山植物が機會ある毎に投げ込まれて、やがてはこの極東の小居に迄持ち來たされることゝなつた。

遊山地のホテルであれば、夕食後はピアノとか獨唱などに、滯在客の隠し藝の展開される可きを、流石に登山の中心地だけあつて、或は階上から下げられたロウプに獅嚙みついて、互にその膂力を試すとか、又は隻手に體重を支へて、他の手で銅貨を幾尺かの彼方に押しやるベニブッシュの技などが競はれた。

スノウドンの頂上には、ランベリスから登山鐵道が通じて居る。二臺許りの客車を、小さい汽關車が押し上げるもので、上りは徒歩よりも遲い程だと謂はれて居る。勿論これは主として老人、婦人、少年、又は登山に慣れない觀光客の爲めである。頂上には休泊所があり、一杯の茶、一片の菓子、又は繪葉書などを販賣し、登山者芳名帳などの類もあつた。吾々は然し常にリユウエスとか、クリブコッホ等を經由して登つたのでこの幼稚な登山鐵道には一度も厄介になる機會がなかつた。山頂のホテルなるものも、日本の山小屋同樣なせま苦しいもので、物價は中々安くない樣に聞いたが、何せスノウドンの頂上もベニバスから僅か三哩半の距離しかないので、泊つて見る機會もなかつた。

印度の軍隊に在りし日には、虎狩を試みたとかいふランキン大佐も、五十歳にして初めてのロック・クライミングにひどく疲勞したらしく、十五歳にして高山に親しんだ私とは年齢の差も手傳つてか、チト勝負になり兼ねるとあつて、一日は溪谷に入つて綸を垂れたが、水の幸もないものと見えて、一尾も針には掛らなかつた。

その後私は再度ベニバス・ホテルの客となつたが、岩登りよりも寧ろ山歩きを主とした旅行であつたのでバースンス・ノウズやデヴルス・キチンも訪ふ機會がなかつた。

歸朝後今に至る迄、依然低山高岳に親しむを忘れないが、氣の合つた相棒が得られないので、岩登りに浮身を窶す機會もない。それにモ一つは更に／＼面白い問題が眼前に横はるので、岩壁に蛸の如くへばりつくのは、先づ／＼隱居仕事に殘して置かう。

會務報告

三月四日理事會報告

出席　評議員三名　理事九名

一、山小屋建設借地願は地圖、建設理由書を添付し東京營林局へ持參説明することとす。

一、山岳廿七年一號に山岳總目錄の地方別、筆者別のものを附錄として添付發行することに決せり。

一、一九三二年度山日記の編輯、山岳バックナンバー整理、財團法人申請等につき報告あり、また協議するところありたり。

退會者

昭和七年二月八日付　（八一八）　東京市　江口　定條
昭和七年二月十日付　（九四二）　東京府　大木　宏
同　二月十二日付　（一一七）　三重縣　大西　源一
同　二月十四日付　（一三八）　東京府　田邊　義雄
同　二月十五日付　（九一九）　兵庫縣　高橋　英三
同　二月二十二日付　（九五〇）　東京府　岩瀬　昌治

第三回關西小集會記事

二月二十四日午後七時から大阪市堂島中町電氣倶樂部にて第三回關西小集會を開き左の講演があつた。

一、冬の富士山（主として準備と天候に就て）　今西錦司氏

一、滯歐中の山旅（十六ミリ映畫上映）　田中　薫氏

甚だ興味多き講演にして來會者七十人に及び盛會であつた。講演の大要はいづれ『山岳』誌上に掲載する筈である。（司會者）

第五十四回小集會記事

二月廿九日夜三會堂にて開催。生憎塚本氏風邪のため親しく撮影苦心談を伺へなかつたのは殘念であつたが映寫は滯りなく運び、例によつて見事な映畫を約二時間に亘り上映し高山低山の四季の姿を滿喫して九時半散會した。來會者約八十名中々の盛會であつた。紙上を以て塚本氏に厚く御禮を申上げる。（司會者）

新着圖書

Sierra Club Bulletin Vol. XVI No. VI Dec. 1931.
Club Alpino Italiano. Rivista Mensile No. II Nov. 1931.
Trail and Timberlin No. 159. Jan. 1932.
Die Alpen Les Alpes-Le Alpi VIII No. I Jan. 1932.
The Geographical Journal Vol. LXXIX No. I. Jan. 1932.
Butlleti del Centre Excursionista de Catalunga C. A. C. No. 439 Dec. 1931.
The Mountaineen. Vol. XXIV Feb. 1932.
La Montagne C. A. F. No. 236 Jan. 1932.
Natural History Vol. XXXXII No. I Jan-Feb. 1932.
白樺旅行會々報　第八年一號
神戸ヒヨコ登山會々報　第二月號
關東山岳會々報　第九年二號
廣島山岳會々報　第十卷二號
ルックサック倶樂部々報　第三號
アルカウ趣味　第十九年三號　日本アルカウ會
山行案内　第七年二號　昭和マウント倶樂部
山の旅　第二十五號　山の旅會
登歩溪流　第六號　東京登歩溪流會
山嶺　第十一年一月號　東京野歩路會
旅行　第七十一號　東京旅行クラブ
ツーリスト　第二十年三號　ジャパン・ツーリスト・ビューロー
アルピニズム　第六號　其社
山と溪谷　第十二號　其社
山小屋　第四號　朋文堂
地震　第四卷一、二號　（木村鑛吉氏寄贈）
廣島を繞る山の研究　第二輯　（磯貝勇氏寄贈）

購入圖書

Peaks, Passes, and Glaciers. 3 Vols 1859-1862.
W. M. Conway—The Alps from End to End. 1895.
G. W. Young—On High Hills. 1927.

圖書基金に就てのお願ひ

本會の圖書基金が昨年度に於て四十五名五十九口の御申込を得ましたことは本會特に圖書係の深く感謝する所であります。

右の圖書基金を以て尠からぬ和洋山岳圖書を購入し、各國山岳會誌及び本邦諸登山團體の會報を合本整理することが出來たのであります。

然しながら圖書室の內容を充實せしむるにはまだ〳〵多くの費用と時間と勞力とを必要とします。本會の圖書室を尠くとも本邦に於いて最も完備せる山岳圖書館たらしむるため此の上とも會員諸氏の御後援をお願ひ致したいと思ひます。

從來圖書基金の御出捐を願つてゐました方々へは別に書狀を差上げることに致しますが、この會報上を以て尙篤志の會員諸氏に圖書基金の御據出をお願ひ致す次第であります。

昭和七年三月　圖書係（松方・伊藤）

追而御申込の形式は左の通りであります。

日本山岳會圖書基金申込書

一、昭和七年度圖書基金何口何圓也

（但し一口年額金五圓）

右申込候　貴名

日本山岳會御中

御申込書丈けを先きに頂戴して後日御拂込み下さつても結構で御座います。

圖書室開室日增加

會報前號に發表しました通り本會の圖書室を開く日を三月始めより增加しました。毎週火木土の三日は午後一時から夕刻まで、月水金は夕刻から、また第一第三の日曜日は午後一時から夕刻まで開室することになりました。一ケ月を通じて全然開かない日は第二第四の日曜日と第一第三の木曜日だけです。午後なり夜分

なり御都合のよい時間に御來室の上或は讀書に或は會談に圖書室兼集會室を御利用下さることを切に希望する次第であります。（圖書係）

四月中夜間開室日當番

一日 渡邊 十五日 松方
四日 藤島 十八日 松本
六日 茨木 二十日 田中
八日 伊藤 廿二日 鳥山
十一日 神谷 廿五日 角田
十三日 槇 廿七日 浦松

山岳のバックナンバー

『山岳』のバックナンバーは會報前號に同封しました廣告にある初期のものの外、其後のものも在庫品があります。何卒御購めの程願上げます また御知合の同好者へも精々御吹聽下さるやうお願ひ致します。在庫號數及賣價は前號に載つております。

圖書紹介

陸地測量部新刊地圖目錄

五万分一地形圖
蘇 澳 二 號 南 澳 一面
五万分一地形圖 修正
白 河 十四號 白 河 一面
長 野 四 號 万 場 一面
佐 倉 五 號 鹿 島 一面
同 九 號 佐 原 一面
同 十五號 千 葉 一面
甲 府 五 號 金 峯 山 一面
同 十四號 市 野 瀬 一面
同 十五號 大 河 原 一面
高 知 十三號 西 條 一面
德 島 十一號 三 本 松 一面
二万五千分一地形圖 修正
水戸近傍 一 號 河 原 子 一面
高田近傍 十四號 關 山 一面
同 十五號 赤 倉 一面
沼津近傍 十三號 吉 原 一面
同 十五號 駿河大宮 一面
大分近傍 三 號 別 府 一面
大阪近傍 四 號 大和高田 一面
靜岡近傍 四 號 靜岡東部 一面
一万分一地形圖 修正
下志津及習志野原近傍 五號 三角原 一面
同 六 號 六方野原 一面
同 九 號 大久保 一面
横濱近傍 五 號 安善町 一面
同 八 號 生 麥 一面
同 九 號 横濱港口 一面
同 十四號 保土ケ谷 一面
（昭和七年二月二十八日）

ヒマラーヤの地圖

ヒマラーヤ山地の地圖はカルカッタのサーヴェイ・オブ・インデイアから購入するより外に方法はないものと思つてゐたが、會員山崎和一氏より左記の店が英國での取次店をやつてゐることの通知を戴いた。郵便日數は却て印度より短いから印度の地圖を求められる方は御照會になつてはどうかと、御參考までに宛名を左に掲記して置く。

Edward Stanford, Ltd., 12—14, Long Ocre, London, W. C.
（T・F）

Adventures of an alpine guide. By Christion Klucker. 32 ill. 10s. 6d.
London Murray.

五十年を超える永いあいだアルプスのガイドとして、三千以上の峯頂に攀ぢたクリスチャン・クルッカーその人の自敍傳の英譯本。彼は百數回の新登攀にリーダーとして參加しその最後のものは實に彼が七十四才のときに行はれたのである。ロッククライマーとして、ステッブカッターとしてアルプスに於けるガイド達の中で第一線に立つてゐた彼はまた地質や植物に深い知識をもち、彼の故郷の山山を溫い心を以て愛してゐた。彼の山友達の内には最も高名な登山家が含まれ、私達はそこにサーエドワード・デヴイドスンやキャブテン・フアーラーの名を見出すことができる。"Die Alpen" の編輯者たるドクター・ジエニーは、『クルッカーはアルプス登山史上の人となつたのだ。彼は先驅者の一人であり、また立派な紳士であつた。』と書き誌してゐる。

壯烈な登攀の苦鬪を語るアルパイン・ブックとは異れる意味に於て私達を喜ばせる書であらう。（藤島）

Kamet Conquered. by F. S. Smythe.

昨年カメットの登頂に成功したスマイスの記錄は既に昨年十一月のアルパイン・ジャーナルに收載されてあるが、別に表題の如き單行本が刊行されるやの通知があつた。まだ決定的のものではないが、挿繪四十八葉、價十六志と書添えてあるところをみると相當の確實性はあらう。書肆は多分前著と同じゴランツと想像される。カンチエンジュンガへの國際登山隊に參加して尠からず業を煮やしたスマイスも、このたびは思ふ存分筆を走らせてゐるであらう。期待される書である。（藤島）

登高行・第八年・慶大體育會山岳部々報・昭和六年十二月發行・二圓

しつかりした内容が盛られてある特に遠く印度から病を押して寄せられた三田幸夫氏の『冬のロータン峠とクル溪谷其他』は簡潔な筆致のうちに、ヒマラーヤ山地の旅についての貴重なるヒントを敍し、また風物風俗を心にくきまで巧みに描き出してゐる。まことに近來の名文章として推賞するを憚らない。（藤島）

關東學生登山聯盟報告・第三號

昭和六年十二月發行・一圓二十錢

穂高岳の研究と谷川岳の研究とを載す。前者が信州側よりの積雪期に於ける登路を殆んど網羅してゐるのはこの連峯に登らんとするものにとつて頗る便利な參考資料とならう。慾をいへば記述の體を統一し各項の末尾に從來發表された文獻の目錄を附加してほしい。後者は上越線開通により益々手近になつた谷川岳の岩壁を詳述してある。（藤島）

爐邊 第五輯 明治大學山岳部

昭和六年十二月十五日發行

部への詞（神宮）山と民俗について（高橋）穂高奥又白谷（馬場）三月の白馬より唐松へ（尖戸）火打山から燒山へ（交野）聖澤溯行（藤井）船形の春（赤星・村井）沼と北信牧場（馬場）陸奥十三から增川峠（高橋）大隅佐多岬（赤星）至佛山と其高山植物（檜山）白萩川溯行劔、赤谷山（村井）鋸岳中之川溯行（太田）冬の小舍日記（笠原）遭難後記（越神、坪井）等の記事の他、年報、部日記、小屋日記、園爐裡邊、爐邊會記錄等あり。

一讀して興味深かつたのは『山と民俗について』『沼と北信牧場』『陸奥十三から增川峠』等で何れも爐邊會員の事になつてゐるのも皮肉だ。年報は一九二八・三—一九三一・一〇の三ケ年半に亙つてゐるが特に珍らしい地方や貴重なる記錄といふべきものはない樣だ。勿論ある一部分を研究的に登るのもいゝ事には違ひないが、同時に廣く歩く事も必要ではあるまいか。各學校の年報を見て何時も感じるので、一寸こゝに書き添へる。（田中）

Das Nebelmeer. 1

東京農業大學山岳部

昭和六年十二月二十日發行

編輯後記によると『一夜漬で纏めたのだから頗るインチキな點もあらう。編輯の不備、校正の不完全、其他總ての不滿も、時代に適した快スピードに免じて許して頂きたい』とあるが、何もかゝる機關雜誌、特に創刊號をインチキをして迄總ての不滿を忍んで迄早く出す必要はあるまいと思はれる。

内容は、地形の變化に就いて（瀧本）春の前穗高と明神岳（石塚）赤澤岳猫耳登攀（河内）冬の藏王（織内・村崎）二月の三ツ峠（增田）三月の槍ケ岳（山田）冬の八ケ岳（增田）劔の西側（織内）春の甲斐野（村崎、野田）穗高のプロフイール（部員）山日記の一節より（伊藤）ランテルスの灯（部員）等であるが何れも參考となる樣な記錄もなく、又編輯後記にある如き感想方面を主とした紀行の優れたのも見受けられない。（田中）

水野祥太郎著

山野スキー術教本　黑百合社發行定價壹圓

この書物は實に多くの特徵と缺點とをもつた書物である。

題名はまさにわがレルヒ時代にでもでてきさうな堅くるしいものであるが、内容はまた反動的に自由奔放な形式をとつた近代的のものである。まことに個性の强い書物である。問題の書物である。從つて興味も深い。

著者はこの數年來、理論スキーに關する所說を公けにしてスキー界を壓してゐた。今一本をまとめてその總決算をしたものである。

スキーに數限りない術派の存在することは當然のことである。してそれらの術派を比較論考すること決して無意義でない。たゞ主として文字に示された理論をもつてこれを試みるは那邊まで眞實性がありうるや疑問である。著者は英獨夥多の著作を讀破し舶載せられたフイルムを注視してこの業をなしとげた。勿論多くの現地考察も繰返されたことだらうが、私はその鋭利なる頭腦と大膽なる態度に敬服するほかない。ことに各派技術の相關々係を論じ表示せるあたり先人の企てなかつた業績として誇るに足るものがあらう。

アールベルグ、カンダハーなどに伍して京都派なるものが取扱はれてゐる。私は京都派、笹川派の實際について何も知らぬが、日本のスキー界から特異な術派を求めるなら他にもより顯著な傾向や教義を示すグループが存在しないだらうか。或は論究に價する理論なしと見たのであらうか。

もつともこの書は術派論のみに終始してはゐない。後半とくところの『山野スキー行の基礎知識』や『練習プログラム』において初心者のために多くの筆を費してゐる。ことにこの部分は他の汗牛の邦書——みな初心者向と號す——にたえて見られなかつた珠玉の文字、實に簡潔要をえた忠言がうず高く書きこまれてゐる。讀者は著者の心覺えのノートを飾り氣もなく見せてくれたやうな親しさを感ずるだらう。

或は『教本』としてこの書を初心者に推すには難色を示す人が多からう。が私は反對だ『初めに山が在り而して後にスキーの存在を認めゑ』人々にとつて特に與へるところ多きは題名によつて自ら明かである。難解な技術論も山野スキー術の向上を念とする人々には再讀、三讀の機緣を與へるであらう。

最後に早忙裡の執筆とはいへ、行文の簡にすぎるのは甚だ遺憾だ。なほ國字問題に特別の關心をもつ著者としては用字に適切ならぬものありまた誤字、誤植の多くあることを難ぜざるをえない。（加納一郎）

山の消息

浦高生雲の兩神山に遭難す

既に新聞紙上で御承知の事と思ふが去月廿三日秩父兩神山に於ける浦和高等學校生徒黑澤正好君一行の遭難に就て兩神社々掌鈴木嘉全氏より小生宛左記の通り通信があつた。

神谷　恭

前略今回學生の遭難は實に意外の慘事で寔に氣の毒に堪へません。犧牲者は秩父郡國神村字野卷、黑澤正三郎氏（栃木高女校長）の獨り息子で正好君（十九才）浦高一年生で一行は黑澤正好、織田明男、下河邊正、永田政晴の四名で地質研究のため雪の兩神登山を計畫し、廿二日河原澤の森本屋に一泊し、翌朝八町峠より尾根傳ひに兩神山本社に登り一位ガタ通りより下山の途につき（註陸測五萬万場圖幅にある點線路に從はず本社の東、三笠山との鞍部に降り此處に設けられ在る營林署の指導標が示す如く左折ヂグザクの路を下り不動瀧の三・四町下日向大谷よりの賽路に合する路を一位ガタ通りといふ）營林署の導標を見て左折日向大谷に向ひ凡三十間余進み、右手に降る路を雪のため見失ひ其まゝ東北へ進み氷穴の頭に出て仕舞、下山路を探す裡に踏み辷らし高さ五、六拾尺もある氷穴の絶壁に墜落したのです。夫れが午後三時半頃で他の三人は驚いて引返すと容易に下山路を發見したので駈け下つて尋ねるうち氷穴下の路に虫の息になつて居たのです。私は織田君からの報せで駈付た處既に氷のように冷く遂に手當の甲斐もありませんでした。日は暮れ風は烈く詮方なく三、四十間余背負出し焚火して夜を明す事になり、翌廿四日朝漸く下山したのです。この日學校より生徒主任江見氏外三人來られ、續いて黑澤君の御兩親が來られましたが遺骸にすがつて悲嘆にくれられる姿に一同すつかり泣かされました。

（後略）

穗高行

今冬の旅行を御通知申上候。

十二月二十八日夜飯田町發二九・三〇日島々泊り三一日朝八時島々發夜九時德澤牧場着、德本峠で夕日に輝く明神を眺め過ぎた爲か峠の下りは暗くなり悲觀致候。道は凡て夏道にて雪少し、一月一日二日荒天、下又白（長七）谷にて遊び候。三日朝七時半發、四時半穗高小屋着前日の降雪約二尺涸澤は雪崩の跡少しも無く異常の緊張振りで出發したるに幸にも氣拔けに終り候。四日荒天、五日涸澤岳・奥穗高岳を遊び候。六日朝七時半穗高小屋發三時槍平着白出谷は上部約二百米をアイゼンにて以下スキーを用ゐ候。瀧は夏道の通り左岸の尾根を特にアザラシを附けて滑降、瀧下にて涸澤側より來合する澤はデブリにて埋り居候ひき、出合附近雪約一尺蒲田川け涸々流れ居候。七日朝七時半槍平發飛騨乘越の下方約一五〇米をスキーデポとし（十一時）槍肩小屋正午稍前着吹雪となり、アンザイレンにて槍ケ嶽に登り申候。肩小屋より往復一時間半、三時下山四時槍平歸着此間の滑降頗る壯快に候ひき、八日雪崩ビラを注意しつゝひたすら下り槍見温泉泊り、九日スキーにて栃尾迄之より自動車及び汽車にて夜富山着夜行に乘り十日朝歸京仕候。穗高小屋の今冬は雪少く温度も高く且天氣に惠まれて學習院の加藤氏（會員）並に帝大國鹽君達の御懇切を頂き愉快に暮し申候。尙今回は有明の大和と小生の二人にて些の故障

無く豫定を終り滿足致候

（會員ながさわ）

冬の尾瀬・毛度澤小屋

暮より正月にかけて尾瀬ケ原水電小舍に暮す。與作岳に登り、沼に遊びたるのみにて至佛にも景鶴にも行かざりしが、高原、深林の逍遙は聊かも吾を失望せしめざりき。

二月中旬、仙倉山麓の毛度澤小屋に二三日を送る。吹雪のため山頂に至り得ざりしも、谷川のほとり雪に埋れたる山小屋の生活は頗る快適なるものありき。最早溪流も雪に蔽はれしならむ。一遊を勸む。（藤島敏男）

冬の木曾御嶽

一月下旬單獨で御嶽へ登りました黑澤口の中小屋に根據を置き廿八日登頂、冬には稀らしい快晴に惠まれて簡單に目的を果す事が出來ました御嶽には立派な小屋が澤山あつて設備も充分整つてゐるのに、積雪期に於ける登山者が極めて尠いのは不思議な位です。現在冬山の案内人は有ませんが、目下スキーを練習中ですから、茲一、二年のうちには案内も出來る事でせう。三拾年來の暖かさで雪も尠く、千本松小屋からスキーをはいた位でした。中小屋から頂上往復七時間半を要しました。六—七合目間の森林帶が少し面倒なだけで雪崩の心配は皆無です。

二月十二日　三谷　慶三

二月の富士山

會員名須川渡氏と共に二月七、八、九日富士山スキー行に於ける極めて簡單なる記録を申上べく候。二月七日午前五時吉田、池谷佐重氏宅出發、七時大石茶屋少し手前にてスキーを着く、七・四五大石茶屋、八・三〇馬返し、九・一五一合目、九・四五二合目一〇・一〇三合目（氣溫零下五・〇度C）一〇・五〇四合目（氣溫零下七・五度）一一・一五五合目池谷佐重氏所有小屋着、此日一日中天氣快晴風なし。一泊、夜最低氣溫零下一二・〇度：二月八日午前八・〇〇出發小御岳社への分道迄スキー玆よりアイゼン、二三八六・〇米（八・五〇）邊りより屏風岩と鎌岩との間の澤（走りの澤）を釋伽岳に向ひ眞直に登る。三〇〇〇米邊より雪は稍堅く六本爪のアイゼンは假令爪に鑛をかけて置いたとは云へ滑落の不安を感ず。八本乃至十本爪を必要とす、ピッケルも石突に鑛をかけて充分光らす必要あるべし、三五〇〇米邊りより向て有方の尾根に取りつき釋伽岳頂上午後一・一五一・三〇、氣溫零下一二・〇度、風は富士山としては極めて靜かなる日和なるべし。歸路は夏路通りに鎌岩の所に降り五合目に着午后四・三〇六合目邊りにてガスが一面に懸り眺望を絶たる。二月九日午前九・三〇小屋出發吉田淺間神社迄スキーにて下降す着一二・〇〇小屋に就きて、吉田口は目下の處池谷佐重氏所有小屋に限り冬期は使用可能他の小屋は極めて頑丈なる戸締りを爲して無斷使用は不可能なり。池谷氏は登山者の依頼によりて自ら同行し或は他に代りの人夫をして同行せしめ戸を開き食事夜具等の世話を爲す、小屋は燃料薪炭充分あり、炬燵あり先づ防寒設備には余り不足なきもゝ如し。而し余りに火氣強くする時は炭酸ガス中毒の恐れあり、煙突はあれども極めて通氣不完全なり、今冬は吉田口よりの富士登山は非常に繁昌して殆んど毎日一、二組の登山客ある有樣なり、小生等と行を共にせし組に早大二人、日大八人、その前日二人の登山者あり又、歸途吉田にて九人の登山者の登れるに會せる樣の狀況にて誠にお山は御繁昌に御座候。

（額田敏）

鹿澤温泉より

小閑を得て鹿澤の湯に參り候。雪は多く人は少く何よりと喜び居候。湯に來てみれば長谷川傳次郎氏在りはからず行を伴にしたる會員飯塚篤之助氏と炬燵を圍みて大いに快談致候。長谷川氏は先日宿より三方峯往復一時間五十二分の紀録を作られし由何とも驚嘆の外無之候。明日は湯丸か三方に登りて雪山の眺望を恣にせんと樂しみに致居候

一九三二年二月二十三日戸塚武彦

白馬より

紀元節を利用致し白馬に遊び申候其概況御報告申上候。

二月六日新宿發車中早大池野氏一行に會ふ。翌朝森上着、親原に遊び落倉小屋宿泊。八日朝案内人松澤嘉一郎を伴ひ神田甫早稻田小屋に登り午後裏の尾根にて遊ぶ。

九日（晴後小雪）午前三時半池野氏一行と共に白馬に向ひ、八時大日岳の一鞍部に到りしも風激く退却に決し午後一時小屋歸着。

十日午前四時發再び白馬に向ふ六時天狗原東天漸く白む高層雲及雲海あり天候を氣づかふ。七時乘鞍岳、高層雲愈々厚く、雪は相當硬し、九時前日の鞍部に達す。九時半大日岳十時五十分—十一時白馬頂上、雲海も散りて越中の平野を望む。午後一時再び鞍部に戻る。漸く東方も晴れ上越山脈殆ど麓まで露はる。同二時—二時半乘鞍岳スキーデポー四時小屋歸着。十一日午前二時池野氏一行白馬に向ふ。同六時吾が一行森上に下る、九時森上着御殿場にて白馬岳に雪煙盛んに擧るを望む。一行五名黑田正夫、同初子、渡邊俊平、白石裏治、松澤嘉一郎（案内）。

小屋の感想

黑木立の中に在る小屋は白樺皮造りの扉寔に美しく彼の笹ケ峯の小屋はいざ知らず、本州他に見ざる優秀な山小屋なり唯惜むらくは餘熱利用の余り迂廻せる煙道はその通風を妨ぐ若し煙突を直接屋根に出したらんにはより以上快よき小屋ならんと存じ候。

この登山にて、最も感謝せざるを得ざることは神田甫の早大小屋利用に有之候。モダーンな設計と、よき位置と、そこにお伴お許し被下候ひし池野氏一行の心おきなき御歡待とは嬉しき限りに有之候。但し山男の氣輕さより行けば泊れる位に思ひ居り候ことは、不覺に有之候早大山岳部には嚴肅なる規則有之、前以つて許可證の交付を受け置かざれば、留守居に一夜の宿をと賴むわけにゆかずとのことにて土曜の夜に思ひ立ちての山登りなぞ以つての外のことに候御尤の儀に候。山あらしのともがらの多き當時、嚴重なる掟有之は可然事と被存候。若し今後ともこの美しきよき小屋に一夜なりとも暖き夢を結ばせて戴かむとなさる方有之候はゞ、早大山岳部に豫め御懇望被遊候事肝要に有之候。老婆心ながら付加置候。されどこの小屋のよさは山に心あるものの一度は懇願して味ひ置くべきものと被存候。（黑田正夫）

會費拂込について

昭和七年度本會費（金六圓）の拂込期日は二月末日でありました。

尙ほ納付されない方は一日も早くなるべく振替貯金にて左記へ御振込下さるやうお願ひ致します。振替用紙は裏きに『山岳』二十六年第三號に同封致しました。　會計課

東京市芝區高輪南町三〇
日本山岳會（東京・四八二九）

原稿〆切

會報原稿の〆切は毎月第一木曜日であります

研究欄

上越國境一ノ倉の文字に就て

湯澤圖幅にある谷川富士（一九七四・二米突）を一ノ倉岳と呼稱する事に就ては上越兩國の山麓を初め一般登山者も異論はない。然し谷川富士は何處の峯を指すかに就ては尙議論のある所で、谷川岳（耳二つ）を總稱する說と、オキノ耳を谷川富士トマノ耳を藥師岳とする說がある。之は要するに淺間神社の奥の院が山頂に在れば問題がなかつたのだが、舊沼田城主が山の鞍部に建立した事と利根川圖誌などには清水峠と三國峠の間に漠然と富士山なる文字を置いた事が問題の起りとなつた譯である此問題は後の機會に讓るとして一ノ倉の『一』の字は『市』であるかを研究して見たい。

清水越の舊道湯檜曾川の上流には地圖に明瞭に『一ノ倉』なる地名があるのに、近頃その西方の澤を市ノ倉澤と書いたり、一ノ倉岳を市ノ倉岳なる文字を使ふやうになつたのは如何なる理由であらうか。

時々之は何れが正しいかを質問されて、私も閉口した事がある。其後古いものを調べて見たが、昔は大して問題にもなる地名でなかつたので一ノ倉の文字は容易に發見する事が出來なかつた。處が最近に到つて偶然にも利根郡の郡村誌（明治十二年九月發行）湯檜曾村の項に『一の倉』の文字を發見する事が出來た譯である。

山岳第十六年第三號奥山上州號の藤島氏の仙ノ倉山、谷川岳方面の記事には『一ノ倉』なる文字が使用されてゐる。

『市の倉』の文字を初めて見たのは一昨年五月の東京日日に掲載された川崎吉藏氏の紀行であつたと記憶してゐる。其後昨年九月の山と溪谷奥利根號では『市』の字を盛んに使用する樣になり、私の原稿などもわざ〳〵『一』が『市』に書改められてしまつた。湯檜曾の阿部一美氏も『市』を使つてゐるので、或時其理由を尋ねた事があるが、明かなる根據はなかつた樣であつた。

一ノ倉の岩壁が將來益〻興味を以て迎へられる時に當つて、此點を明瞭に定めておく方がよいと思つて研究欄に『一ノ倉』なる文字の正しい理由を主張した次第である。

今後とも此地方の山谷の名稱に就ては研究の天地が待ち設けられてゐるだけに多くの問題が起る事であらう。既に谷川岳のマチガ澤やオヂカ澤或は萬太郎のイノマチの澤等に於て、判斷に苦しむ樣な不用意な當字が諸雜誌類に現れてゐる事は見逃す事が出來ない。

去る一月末日附にて陸地測量部より五萬分一地形圖四萬の修正版が發行された事は既に會報前號によつて御承知の事と思ふ。どの程度まで修正されてゐるか興味あるものであるが、未だ入手出來ず本欄に紹介出來ないのは遺感である。

（角田吉夫）

編輯後記

本號第一頁には久方振で武田博士の快筆を迎え洵に欣びに堪へない。

吾々は寡聞にして今日まで博士が岩登りの先覺者であつた事實を知らずに來た事を悔むものである。

本號に挿入せられた茨木氏のカットはいつ見ても氣持か良い、素描の裡に山の情景が活々と現れてゐる。

前號に於て第一頁の原稿並に會員通信に就て係りとしての希望を申上げて置いた處早速高頭氏より『日本山岳誌の編輯印刷の時に困つた談』岩永氏よりは『山岳寫眞』等多くの玉稿を戴いた事は寔に感謝に堪えない乍併紙面の都會上次號に讓るべく余儀なくせられたことは遺憾であつた。

愈々暖かになりました。圖書室の開室日も增加されました。當番の理事も精々勉强して詰めて居ますから可成多くの會員に利用して戴き度いと思ひます。

（神谷　恭）

會員章をつけて下さい

山に登られる時

小集會に出席される時

集會室圖書室に來室される時

會員章をつけて下さい

昭和七年三月十四日印刷
昭和七年三月十五日發行

編輯兼發行人　角田吉夫

印刷人　東京市芝區琴平町一　不二屋ビル

發行所　日本山岳會會報編輯所

（東京印刷所）

ルツクサツクと登山具は片桐へ!!

キスリンク型	¥ 7.50 —— ¥ 10.00
スキー型	¥ 8.50 —— ¥ 12.00
スキー用小型	¥ 2.50 —— ¥ 3.50
ウインドヤツケ	¥ 5.00
羽根入シユラーフサツク	¥24.00
シール	¥ 2.50 —— ¥ 6.00
ゾームシール	¥ 7.00

◇**スウイス**からピツケル・ザイル・アイゼン入荷致しました。何卒御用命下さいませ。

片桐テント登山具店

神田區今川小路二ノ四（今川小路電車停留所前）